

ふるさと信濃大町に暮らす 北アルプス一番街

おおまち市長(長野県) 牛越 徹

Toru Ushikoshi



はじめに

大町市は長野県の西北部、北アルプスの麓に広がる高原の街です。標高3180mの名峰槍ヶ岳をはじめ、日本百名山が4座もあり、また、大正6年には日本初の登山案内者組合が創設されています。現在は、黒部ダム、立山黒部アルペンルート^のの玄関口として年間300万人ものお客さまを迎える国際山岳観光地です。

市立大町山岳博物館は、特別天然記念物ライチョウ、カモシカの飼育研究や、鹿島槍ヶ岳カクネ里雪溪の氷河の学術調査で知られており、豊かな自然に惹かれ、子育て中の若い世代の移住も目立ちます。自分を



市街地越しに見る北アルプスの峰々

語るとき、このふるさとの大自然に触れない訳にはいきません。

大学進学で故郷を離れ長野県庁での勤務を経て10年前に帰郷し、大町の美しさに日々感動を新たにしています。特に家の窓から仰ぎ見る、四季折々のアルプスの秀麗な姿は、はっと息をのむほどで、冬、純白の雪をまとった峰々が深紅の朝焼けに染まるモルゲンロートは、早起きした時にだけ出える絶景です。

こうした環境ですから、周囲には山好きが多く、私も趣味はと問われれば山登りと答えます。中学に始まり、高校大学、そして就職してからも山に登ってきました。余暇の時間が少ない今は、なかなか登ることはできませんが、まれに仕事からみで山に行く幸運もあります。毎年6月第1週の開山祭慎太郎祭は、後立山の開拓者故百瀬慎太郎の名を冠していますが、翁は「山を想えば人恋し 人を想えば山恋し」で歌人としても知られています。安全祈願の式典が終わると、私も針ノ木岳の大雪渓を登り詰め、雪がたっぷり残る春山を楽しみます。6年前にはお隣の富山市森雅志市長さんの呼び掛けで、市域の境に鎮座する三保蓮華岳で山岳サミットが開催され、3日間



鳥帽子岳(2628m)を背に至福のひと時の筆者

気持良い汗を流す

の山行で北アルプスの最奥を鳥帽子岳まで縦走する至福の時を過ごしました。

私は趣味が多い方で、読書や日曜木工、日曜土木のほか、スポーツではスキー、弓道、ソフトボールに勤しんでいます。スキーは板を履いて生まれてきた、というほどではありませんが、小さいころから親しみ1級は取得しました。しかし、冬季スポーツのメッカ信州ではこれしきの腕は自慢にもなりません。高校時代に団体に出場した弓道は、今は年に数回稽古するに留まっていますが、幸い袴を逆さまに着けたり、隣の的を射抜くようなことは今のところありません。

現在一番身近なのはソフトボールで、市内では地域ごとにリーグが結成され、約40チームが盛んに覇を競い合っていて、私も

地区のチームに所属して都合の許す限り出場しています。もちろん試合前の準備運動には念を入れてはいますが…。

本市ではさまざまなおスポーツが盛んで、バドミントンの世界王者奥原希望さんや空手の世界ジュニア選手権優勝の宇海水稀さんは、将来を嘱望されており市を挙げて応援しています。

考えてみますと、私は体を動かすのが好きなようで、家の脇の3坪農園の手入れや、庭木、山野草などの庭いじりにも手を染めていて、毎年暮れも押し迫る一日、庭木の雪囲いに汗を流します。玄関先の椿や山茶花は大町の厳しい冬には勝てそうになく、素人ながら藁や縄を使って形を整え、見よう見まねでも上手にできた年には一人悦に入っています。また、冬の雪かきも結構な重労働ですが、意外にやりがいのあるマイイベントです。片付けた後が形となっ



雪囲いに冬が迫る

て努力の跡が目に見えるからです。毎日の激務でストレスが大変でしょうとよく言われますが、こうした気分転換が身と心には良いのかもしれない。

長野オリンピックの思い出

これまでの人生で最も印象に残るのは、'98長野冬季オリンピック組織委員会に勤務した6年半の経験で、特に会場責任者を務めた白馬ジャンプ会場の日々は、忘れることができません。大会の前々年からワールドカップなどで競技や会場の運営は準備を整えており、残るのは本番の危機管理だけでした。厳冬の屋外競技で最大の課題は天候で、気象条件だけではどうにもなりません。その上、冬の大会では国内最大となる17万9000人も観客を迎えたジャンプ会場の運営は極度の緊張を強いられました。特に2月17日のジャンプ団体戦は、一日おき5回の競技の中、唯一猛吹雪となり綱渡りの試練となりました。刻一刻と変化する天候の下で、10時すぎに小康状態になるとの精密な予報システムを信じて第1ラウンドを強行したものの、最強の日本チームはこの時点でなんと4位。天候の回復が遅れる中で2本目を開始。中断を余儀なくされ、テストジャンプを繰返し挟みつつ果敢に競技を進め、ようやく12時すぎ、最後の船木選手の見事なジャンプで日本が優勝を飾り幕を閉じることができました。ジャンプ

競技では番狂わせは許されず、力のあるチームが実力どおりの力を発揮できる運営が求められたのです。

今でも長野オリンピックが話題になるとジャンプの映像が流れ、原田、船木両選手たちが抱き合って喜ぶ感動の姿が映し出されます。冬季オリンピックを飾る歴史の現場に立会い、苦楽を共にした10000人を超える競技役員や運営スタッフ、ボランティアの皆さんは生涯忘れぬ仲間です。百瀬翁の、山を想えば人恋しの歌のように、昔のことを想えば人を思い出し、人を偲べば昔が懐かしいという感慨は、今日に汗し、明日に向かって生きる私たちにとって元気の源だと思っております。



ジャンプ会場の仲間たちと(五輪旗の中央付近に筆者)